燈籠、むかしありしとや、中比絶侍りしに、寶暦四戌の年より再興せし也、紙ざいく絹ざいくいろいろ有、

七月廿一日より初り、八月卅日比迄、日數は年によりて極なし、又作り物も同年に始、十一月也、日限定らず、十五日があいだ也、すべて此里の紋日賑はしき中にも、とりわきて、三月廿一日東寺御影供、壬生大念佛の間、五月住吉祭、七月おどり、灯籠作りもの、新艘出る日、此時諸人見物、晝夜を不分、群集廓中に充滿す、

俄

〔嬉遊笑覽九 娼妓〕俄といふことは、京都祇園の祭禮、また島原住吉の祭の煉物などを學べるにや、その始は、享保十九年甲寅八月、九郎助稻荷正一位と官階ありて、その祭禮より起れりとなり、それ故近ごろ迄も、俄ある內は、大門口に葉付の竹二本左右に立、玄め繩引はへてありしが、今はさる事もなしとなん、これら古今の沿革なり、

慶遊里

〔慶長見聞集九〕遊女共江戸をはらはるゝ

見しは今、江戸繁昌にて、諸人ときめきあへる有樣、高きも、賤きも、老たるも、若きも、かしこきも、おろかなるも、彼まとひの一つやんごとなし、されば吉原町を見るに、遊女共我おとらじと、べにおしろいをかほにぬり、門毎に立ならびたるは、誠に六宮のふんたいの顏色も、是にはまさらじ、○中略此由御奉行衆聞召、とかくかれらを江戸におくべからずと、女の數をあらため給ふに、をしやうと號する遊女卅餘人、その次の名をうる遊女百餘人、皆こと〳〵く箱根相坂をこし、西國へながし給ふ、實や此道は智者も愚もかはる事なし、戰國策に男色老をやぶる、女色舌を破るといへり、此道ふかくつゝしむべき事也、

遊女屋

〔異本洞房語園上〕或時町御奉行島田彈正樣、甚右衞門へ御尋には、總て遊女どもの事を、轡といふは、如何なる子細ぞと御たづねありし、甚右衞門申上るやう、傾城屋を轡と申事は、京六條の三筋